



世帯数 6,013戸
人口 14,038人
(令和2.9.1現在)

第13回寿地区子連れコンサート

8月29日(土)午前10時より、寿公民館大会議室において「寿地区子連れコンサート」が開催されました。

192サロン運営委員会が主催するこのコンサートは次代を担う子どもを安心して産み、育てる環境を地域で支援するとともに、親子でも気軽に楽しむ場の提供を目的として開催しており、今年で13回目の開催でしたが、新型コロナウイルス感染予防対策のため、例年より規模を縮小しての実施となりました。それでもお子さん連れのご家族17組42名を中心に約60名の参加があり盛会に行うことができました。

今年の演奏者は、地元寿小池在住のマリンバの北山結香さんを中心に、ヴァイオリンの花村祐美



さんとピアノの服山桜子さんの3人の先生方がソロ活動とは別に、1年程前から一緒に活動するようになり、寿地区では今回が初めてトリオでの演奏会となりました。

子どもたちにも馴染みのあるアニメの「夢をかなえてドラえもん」や「となりのトトロ」から穏やかな「タイスの瞑想曲」元気のよい「情熱大陸」など幅広い曲を楽器の解説を交えながら演奏し、参加者はマリンバなど珍しい楽器に目を輝かせながら、素敵な演奏に心を癒され楽しい夏のひと時を過ごされました。



【館報編集委員 松澤憲一】

正しい歩き方講座

梅雨が続く時期、7月16日(木)・25日(土)・31日(金)の3日間、寿体育館にて寿公民館主催の「正しい歩き方講座」を開催しました。生涯スポーツ指導者の資格を持つ伊藤重次郎先生ご指導の下朝9時から開始し、公民館の周辺をウォーキングしました。

講座では、まず始めに体育館内で怪我を防止するための正しい姿勢、準備運動を教わりました。靴ひもの外れない結び方、スポーツシューズの正しい履き方など分かりやすく先生からご指導いただきました。参加者は興味深そうに聞き入って



いました。

2日目

は、連日は、続く大雨で体育館内だけでのウォーキングとなりましたが、10歩で何メートル歩けるか参加者一人ひとりの歩幅を計測しました。3日目は、歩行の際転倒防止、または運動効果を上げるウォーキングストックの使い方を紹介した後、晴天の下、寿地区を30分ほどかけてウォーキングしました。



3日あわせて、25名の方にお越しいただきました。参加者からは「普段運動をすることがないので運動できる機会が出来て良かった」、「講師の先生に丁寧に教えていただけて楽しかった。機会があれば次も参加したい」と声をいただき、大変好評でした。



【寿公民館】

町会連合会で県に牛伏川整備を要望

9月3日(木)、寿地区町会連合会(百瀬泰雄会長)では、昨年度から調整を進めていた牛伏川整備に関わる要望書を、長野県建設事務所長及び奈良井川改良事務所長に提出してきました。

牛伏川は土手が住宅より高い天井川であることから、過去の災害はもとより、昨今の全国各地の豪雨災害、台風災害の被害を見ると、洪水の心配が尽きません。住民の皆さんが安全、安心に暮らし続けるために、「①新白姫橋上流の樹木の繁茂した河床の早急なる整備」「②新白姫橋から田川の合流点の間の河床の定期的な整備」の2点について要望しました。



長野県建設事務所長からは、「現場を確認した上で緊急性の高い箇所から対応を考えたい」との回答をいただきました。

【寿地区町会連合会】

わがまち御神楽

小池神社の秋の大祭で、「御神楽」の奉納があります。その舞を担当されているお2人にお話を伺いました。



●まずはお名前と年齢をお願いします。

獅子頭を担当している百瀬長司、55歳です。(以下百と略す)

後被りを担当している清水幸一、55歳です。同級生です。(以下清と略す)

●御神楽との関わりを教えてください。

「百」前任の踊りを担当している人から、20歳頃強引に頼まれました。



清水幸一さんと百瀬長司さん

断るに断れなかったです。

「清」私もお祭りに関係する人から同じ時期に頼まれました。

一緒にベアを組んで始めました。断れなかったですね。

●現在、「笛・太鼓」の後継者がいなく、「録音テープ」でやっているが、如何ですか。

「百」2人で始めた頃は、笛も太鼓も生演奏でやっていました。

そのうち、笛がテープに代わり、その後太鼓もテープに代わりました。

「清」最初は前任者から直接

一緒に踊りながら覚えましたが、いつ頃から、舞もビデオを撮りましたね。舞は、笛や太鼓が生演奏の方が踊りやすいです。

●今後の見通しはどうですか。

「百」体が続く限りはやりえます。

「清」そうですね。

●後継者の育成についてはどうですか。

「百」この地に住み続ける人で、やる気のある人でないとダメだと思います。

「清」自分たちのように、無理に頼んでも、今の人には通用しないと思う。

●最後に何かあればお話をください。

「百」「清」御神楽を見に来る人が少ない。小池にはこういう伝統芸能があることを知ってほしい、見てほしいです。

取材を終えて、お二人のご厚意で成り立っている「御神楽」この伝統行事を、今後どのように継承していくのか見守りたいと思います。

(寿版330号の記事参照)
【館報編集委員 清水壽雄】

エピソードで綴る寿の歴史 信玄・勝頼と直談判した小池の人々

寿小池の交差点を寿台団地に向かつて上って行くと広大な屋敷林を今に残す草間家が段丘の上に見えてきます。寛永3年(1626)草間家の当主であった草間三右衛門尉は内田村との間で過去に起こった水争いや境論争について「草間三右衛門尉書留」(草間家文書)を書き残しています。今回、この書留によって武田信玄・勝頼の裁判についてみてみたいと思います。

永禄4年(1561)北内田村と小池村・白川村との間で牛伏川から取水した用水の分水水量を巡って水問答(水争い訴訟)が起りました。小池村と白川村は内田の言分に異を唱えて甲斐の武田信玄の元に出訴します。この時、三右衛門尉は「我は、八つの年、か様の義は後々末代の儀に候間、参り候へと親、申し候間、罷り越し、能く能く覚え申候」と記しています。大人達は子供の記憶によって水の配分の決まり事を末代まで伝えようとしたと考えられます。信玄は即座に検使を派遣し現地調査を命じ、当時深志城に在城していた島田民部丞も現地へ出向かせ、判定を下しています。分水地点に銘板を2枚用意させ、先ず1

枚に同じ大きさの穴を2つあけ、取り入れ口に伏せ、1つの穴の水を北内田分とししました。もう1つの穴から流れ出る水の下方にもう1枚の板に2つの同じ大きさの穴をあけ1つを小池分、1つを白川分と水を分けました。即ち北内田へは4分の2、小池へは4分の1、白川へは4分の1と分水したのです。北内田の分水水量が多いのは昔からの水利権が生きていたのでしょう。この場所にそれぞれの村から代表者が立ち会っていました。北内田からは百瀬志摩、平右衛門尉、白川からは惣三右衛門、与左衛門尉ら計4名、小池村からは清右衛門、清左衛門尉、掃部助、我等親(三右衛門尉の父)の面々です。北内田の百瀬志摩は名字を持っています。「尉」の官位を持つ人物は村の有力農民であろうと思われる。ここでは三右衛門尉の父親の名前は分かりませんが、その出自は最近の研究(「信濃」67・12「信濃」69・7)で、初め小笠原長時に仕えた侍で武田氏時代は帰農し、武田氏滅亡の後深志城を奪回した長時の子小笠原貞慶とその後に松本に入封した石川氏に仕え更に小笠原秀政に仕え、その後帰農した地侍であったと考えられ



信玄ゆかりの現在の牛伏川の用水分水地

【寿史談会顧問 青木教司】

ています。天正4年(1576)小池と内田村の境の論争が起ります。小池衆は武田勝頼に裁定を求め解決しています。天正8年(1580)小池と内田の間で入会を巡る山論が起きました。この時は7月・10月・翌年正月・2月に小池衆は甲府に出掛け奉行衆に裁定を迫りますが論地が勝頼の身内だったため解決しませんでした。天正9年(1581)3月小池衆は武田勝頼のいる志摩の湯(現甲府市湯村温泉)の湯治場へ出掛け直談判を行いました。勝頼は現地調査を踏まえ慣行を考慮して、小池側の主張通り「元のように入会すべし」と申し渡しました。以上のように戦国大名武田氏は小池の農民からの訴えを聞き取り、現地調査を行い正統な理由に基づいて「公」としての判断を下しています。やがて土豪出身の有力者は領主から村の名主とか庄屋として把握され近世農村が整備されていきます。